

岡 博先生のご逝去を悼んで



岡 博先生

『臨牀消化器内科』編集委員であられた元東京大学第一内科教授 岡 博先生は、令和元年10月9日、90歳のご生涯を閉じられました。ご家族のお話では老衰とのことで、最後は点滴も漸減され、安らかな最期であったと伺っております。ここに衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。近年、聴力低下はございましたが、とてもお元気であり、東大第一内科同窓会には平成30年まで毎年ご出席を賜っておりました。本年、令和元年6月の同窓会にご欠席になり、心配申し上げます。急な訃報に接し大変驚いた次第でございます。

岡 博先生は、昭和4年東京のお生まれで、東京高等学校を経て昭和28年に東京大学医学部医学科を卒業されております。卒後は第一内科に入局され、日産厚生会玉川病院、東京通信病院の勤務後、昭和39～41年にフルブライト留学生としてピッツバーグ大学に留学をされております。帰国後、第一内科助手、医局長を経て、昭和49年に助教授に、そして昭和58年に教授に就任されました。小生が東大医学部の学生時代に、臨床実習で第一内科を回った時は、学部長で不在がちな織田敏次教授に代わり、助教授であった岡先生が病棟回診等で学生のご指導を

して下さったことをよく覚えております。

岡 博先生は、もともとは糖尿病がご専門であり、第一内科では25研という研究室を率いておられました。織田先生の助教授として次第に肝臓学に軸足を移され、日本肝臓学会でご活躍をいただきました。昭和59年から平成4年まで8年間にわたり理事を、昭和61年に肝臓学会東部会会長、そして、昭和63年に肝臓学会総会会長をお務めになりました。肝不全、劇症肝炎、ウイルス肝炎などの領域においてご功績を挙げられました。また、日本肝臓学会名誉会員の顕彰を受けておられます。

小生は、昭和57年に東大第一内科に入局致しましたが、実は、織田先生の退官後10カ月間、後任教授が決まらず、教授が不在の時期の入局でございました。口の悪い友人からは「誰が教授になるかわからない教室に入局するなんて」と揶揄されたこともありましたが、岡先生が教授にご就任されてから、第一内科はしっかりと発展を続けたことは言うまでもありません。

雑誌『臨牀消化器内科』においては、創刊時より、編集委員の代表のお立場でご尽力されました。小生は東大第一内科(当時は感染症内科になっていましたが)助教授に就いた翌年である平成11年から編集委員を務め、肝臓領域の担当を岡先生から引き継がせていただきました。当時の編集委員であられた岡 博先生、丹羽寛文先生、中村孝司先生、玉熊正悦先生が、皆、鬼籍に入られたことを改めて思い、寂寥の感に堪えません。

先生の消化器病学、肝臓学におけるご功績とご指導、『臨牀消化器内科』におけるご尽力に感謝申し上げます。岡 博先生にお別れを申し上げたいと存じます。

ありがとうございました。

令和元年10月21日

小池 和彦

・東京大学大学院医学系研究科消化器内科学 教授
・東京大学第一内科同窓会 代表